

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年5月19日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18320021
研究課題名（和文）モノ学の構築—もののはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する
研究課題名（英文）Formation to MONOlogy

研究代表者
鎌田 東二(KAMATA TOJI)
京都大学・こころの未来研究センター・教授
研究者番号：00233924

研究成果の概要（和文）：

日本語の「モノ」には物質的次元、人間的次元、精神的・霊的次元が含意されているという問題認識に基づき、日本文明の創造力の基底をなすその三層一体的な非二元論的思考の持つ創造性と可能性、またその諸技術と表現と世界観をさまざまな角度から学際的に探究し、その研究成果を4冊の研究誌「モノ学・感覚価値研究第1号～第4号」（毎年3月に研究成果報告書として刊行）と論文集『モノ学の冒険』（鎌田東二編、創元社、2009年11月）にまとめて社会発信した。また最終年度には、「物からモノへ～科学・宗教・芸術が切り結ぶモノの気配の生態学展」（京都大学総合博物館）と、モノ学と感覚価値に関する3つの国際シンポジウムを開催した。

研究成果の概要（英文）：

There are a material dimension, a human dimension, a spiritual level to a Japanese "MONO (thing)". Based on such point of view, We searched originality and the possibility that the thought of the non-dualism of three levels of oneness to make the basis of the creativity of the Japanese civilization had. And we researched interdisciplinary and the many technology and expression and a view of the world from various angles. And also we published four study magazine "the MONO & the sense value studies" vol.1~vol.4 and "A challenge of MONO studies"(Toji Kamata edition, Sogensha 2009). In addition, we held "MONO studies exhibition (Kyoto University Museum) and three international symposiums about the MONO & the sense value.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2006年度 | 3,900,000 | 1,170,000 | 5,070,000 |
| 2007年度 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |
| 2008年度 | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |
| 2009年度 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 13,100,000 | 3,930,000 | 17,030,000 |

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：モノ学、感覚価値、身体論、聖地、知覚、認知科学、もののはれ

1. 研究開始当初の背景

(1)「モノ」が単なる「物」ではなく、ある靈性を帯びた「いのち」を持った存在であるという「モノ」の見方の中に、「モノ」と人間、自然と人間、道具や文明と人間との新しい関係の構築可能性があると考え、そのあり方を探ると同時に、快美を表わす感覚価値形成のメカニズムを分析する必要性を痛感していた。

(2)また、21世紀文明創造に向けて、新しい人間認識と身体論と感覚論の深化と再編集をはかり、人間の幸福と平和と結びつく「モノ」認識と「感覚価値」のありようを探りながら、「モノ」と「感覚価値」を新しい表現に結びつけ、大胆な表現に取り組む必要を感じていた。

2. 研究の目的

(1)そこで、日本文明を作り上げてきた創造力の基底をなすと考えられる「モノ」認識と、その「モノ」認識に基づく価値観と表現のありようを、宗教学・美学・芸術学・比較文化論・比較文明論・脳科学の観点と研究成果を取り入れながら、原理的かつ事例的に研究し、創造力研究とその表現・制作に寄与することを目的として研究を開始した。

(2)そして、そのような理論的かつ実践的研究に基づいて、21世紀文明創造に向けて、新しい人間認識と身体論と感覚論の深化と再編集をはかった。

3. 研究の方法

(1)宗教学・美学・芸術学・比較文化論・比較文明論・脳科学・認知科学の観点と研究成果を取り入れて学際的に研究し議論する。方法論としては、文献・思想研究、フィールド研究、臨床研究、実験研究・表現研究を交錯させつつ、議論する手法を取った。

(2)共同でフィールドワークやワークショップを行い、問題意識の共有化と間主観化・間身体化をはかった。

(3)研究者と芸術家がコラボレーションしつつ、理論と実技(実践)・表現とを連係させ、最終的に具体的な表現物として提示した。

(4)「モノ」と「感覚価値」を新しい表現に結びつけ、大胆な表現に取り組むための研究・表現組織・集団として「アート分科会」を設けて活発に活動した。

4. 研究成果

(1)①「モノ」認識の原理的研究—「もののはれ」「もののけ」から「ものづくり」まで、②モノと心の統合点としての身体性の研究、③「感覚価値」形成の研究、④モノ認識の比較文化史的・比較文明史研究、⑤感覚拡張の研究、⑥「気配」の研究を進め、文献・思想研究、フィールド研究、臨床研究、表現研究などの研究方法を駆使し、研究成果を研究会形式で発表・討議し、論文化し、『モノ学・感覚価値研究第1号～第4号』に掲載し、同時に、モノ学・感覚価値研究会のホームページ上においてPDFにて全頁公開した。

(2)2009年11月に、『モノ学・感覚価値研究』に掲載された40篇の論考の中から14篇を選んで加筆修正を加え、「第一部 モノと気配とモノガタリ」、「第二部 モノと情緒とワザ」、「第三部 モノと装置と知覚」という三部仕立てに再構成して編集し、『モノ学の冒険』(鎌田東二編、創元社)として刊行した。第一部が「モノ」の精神的・霊的次元の研究、第二部が人間的次元の研究、第三部が物質的次元の研究である。

(3)さらに、それに連動して、4年間の研究を踏まえて、研究者とアーティストがコラボレーションして30点余の作品をつくり、「物からモノへ～科学・宗教・芸術が切り結ぶモノの気配の生態学展」と題して京都大学総合博物館で展覧会を行った。また3つの国際シンポジウム「もの派とモノ学—ものからモノへ」「モノと琴とシャーマニズム」「多層的な感覚価値モデル」と4つのセミナー、3つのワークショップ、1つのイベントを開催した。

(4)本研究プロジェクトの特徴は、アーティストと研究者が協働作業をしてきた点にある。学際的とか超領域的とか文理融合とかと言われてきた異質な領域間の結合に「芸術」あるいは「芸術創造」という媒介項を入れると、そこに具体的な接続点が見出せ、座標軸を定めることができるという見通しが得られたことも重要な成果の一つである。

(5)固有の言語に底流する「根源語」とは、当該言語において、極めて使用頻度が高い上に、文法的(統辞論的)にも概念的(意味論的)にも核(芯)になる語であり、日本語における「根源語」は「モノ」(物)と「コト」(事)である。それは「物事」と熟語化されることで、世界のすべての現象を包含的に指示すると同時に、「モノ」は物体としての

現象の側面を、「コト」は運動としての現象の側面を分割的に指示している。言い換えると、現象の粒子性と波動性とも、主語性と述語性とも、体と用とも言い換えることができよう。これをまとめておくと次のようになる。

| | |
|--------|--------|
| モノ (物) | コト (事) |
| 物体 | 運動 |
| 粒子性 | 波動性 |
| 主語性 | 述語性 |
| 体 | 用 |

(6)「モノ」の三元性——①物・身体、②者、③霊を輪郭づけた。第一に、モノの霊性の次元を宗教部会において、「モノと琴とシャーマニズム」国際シンポジウムを開催してモノの霊的・精神的次元を解明した。第二に、モノの者性の次元を芸術部会において展覧会と「もの派とモノ学」シンポジウムを開催することによりモノの人格的次元の解明と表現を行った。第三に、モノの物性の次元を科学部会において、「多層的な感覚価値モデル」シンポジウムを開催することにより、モノの物質的・身体的次元を解明した。

(7)古語の「ワザヤギ」とは、魂を招く作法で、「ワザヤギ」の一種の言語精霊を呼び出す技法として、琴弾のワザがあった。つまり、神聖言語＝神託・託宣を引き出す(弾き出す)「モノ」として琴が用いられ、「言」(観念あるいはこころ)と「事」(現実)とは「琴」弾きのワザによって媒介され結びつけられた古態を考察した。

(8)感覚価値研究とは、心に絶え間なく生じる感覚から社会の中で流通する価値までを、様々な視座から多層的に捉えなおすとともに、そこから新たな人間観を提案する学際・編集的研究領域である。自己認識がどのように生まれ、進化してきたかという視点、コミュニケーションの生成原理と、ロボット技術を介したその再構成という視点、情報が流通するなかでどのように価値が生じるのかの視点から感覚価値を解明した。キーワードは、自己認識、社会性、コミュニケーション、情報と価値、である。感覚価値の作業仮説的定義として、【人間の「モノを見立てる感覚」が価値を生み出す。それは、「異質なモノを結びつける力」であるため「モノとモノとの間に異常接近や超越などの変異を起こす」のである。／人間の「物語」を定位・所有する感覚」が価値を生み出す。それは、「物語は質感とともに存在」するため「物質の質感は知覚的想像力の根拠」となる。／人間の「自

己をメタ的に理解する感覚」が価値を生み出す。それは、「自己の認識が他者の認識を生み出す」ため「自己の内部状態を他者との関係において自己調整することが可能」となる。／人間の「身体とモノとの切り結ぶ感覚」が価値を生み出す。それは「私たちの身体は不定さを伴う」ためいつも「環境との間に新たな意味や価値を求める」のである。／人間の、「情報を圧縮する感覚」が価値を生み出す。それは、「身体的文脈を利用して行われる」ため「直感的 (aesthetic)」である。】などを掲げ、討議し、感覚価値研究の領域を位置づけた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計61件)

- ① 鎌田東二「日本神話における琴とシャーマニズム」『モノ学・感覚価値研究第4号』査読無、15-21 ページ、京都大学こころの未来研究センター発行、2010年3月
- ② 原田憲一「モノ学・感覚価値研究会展覧会の意義——地球が生み出した美と人間が生み出す美」『モノ学・感覚価値研究第4号』査読無、80-83 ページ、京都大学こころの未来研究センター発行、2010年3月
- ③ 尾関幸「ロマン主義美術——循環と再生への期待の形」『モノ学・感覚価値研究第3号』査読無、89-96 ページ、京都大学こころの未来研究センター発行、2009年3月
- ④ 鎌田東二「柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術」『京都造形芸術大学紀要第12号』京都造形芸術大学、2008年10月査読有、128-138 ページ
- ⑤ 原田憲一「1億年後の世界から見た人間の生命史的意義——美の化石美術館構想」『山形応用地質第28号』、査読有、2008年、45-51 ページ
- ⑥ 岡田美智男「人とロボットとの相互行為とコミュニケーションにおける身体性」『現代思想Vol. 36, No. 16』青土社、査読無、2008年、300-311 ページ
- ⑦ 島藺進「日本のスピリチュアリティの伝統と死の自覚——無常観・浮世観を手がかりに」『トランスパーソナル心理学／精神医学第8巻第1号』、査読有、2008年6月、32-36 ページ
- ⑧ 鎌田東二「トランスする身体の探究——宗教における行と身体」『宗教研究第355号』日本宗教学会、2008年3月、査読有、21-43 ページ

[学会発表] (計 5 件)

- ① 原田憲一「3つのつながりから収奪と環流を考える」第3回比較文明学会特別研究部会「収奪文明から環流文明へ」2010年3月20日、三鷹市コミュニティ・センター
- ② 鎌田東二「収奪文明から還流文明へ—久高島から世界を見る」比較文明学会、2009年11月29日、立教大学(東京)
- ③ 原田憲一「科学技術から見た収奪と環流」比較文明学会、2009年11月29日、立教大学(東京)
- ④ 鎌田東二「歩育と歩行」人体科学会、2008年11月23日、関西大学(大阪)
- ⑤ 鎌田東二「宗教における行と身体」日本宗教学会、2007年9月15日、立正大学(東京)

[図書] (計 7 件)

- ① 鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010年5月、224ページ
- ② 鎌田東二編『モノ学の冒険』創元社、2009年11月、304ページ
- ③ 鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川学芸出版、2009年9月、262ページ
- ④ 梅原賢一郎『感覚のレッスン』角川学芸出版、2009年6月、286ページ
- ⑤ 河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版、2008年11月、214ページ
- ⑥ 細野晴臣・鎌田東二『神楽感覚』作品社、2008年10月、7-15ページ、19-184ページ、205-245ページ
- ⑦ 鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年9月、296ページ

[その他]

ホームページ

モノ学・感覚価値研究会

<http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌田 東二(KAMATA TOJI)

京都大学・こころの未来研究センター・教授

研究者番号：00233924

(2) 研究分担者

梅原 賢一郎 (UMHARA KENICHIRO)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：60232906

河合 俊雄 (KAWAI TOSHIO)

京都大学・こころの未来研究センター・教授

研究者番号：30234008

(H20→H21：連携研究者)

島菌 進 (SHIMAZONO SUSUMU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20143620

(H20→H21：連携研究者)

黒住 真 (KUROZUMI MAKOTO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：00153411

(H21：連携研究者)

船曳 建夫 (HUNABIKI TAKEO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90165457

(H20→H21：連携研究者)

原田 憲一 (HARADA KENICHI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：90134147

藤井 秀雪 (FUJII HIDEYUKI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：70368059

中村 利則 (NAKAMURA TOSHINORI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：50330048

(H20→H21：連携研究者)

小林 昌廣 (KOBAYASHI MASAHIRO)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・教授

研究者番号：30181695

(H20→H21：連携研究者)

尾関 幸 (OZEKI MIYUKI)

東京学芸大学・芸術スポーツ科学系・准教授

研究者番号：10361552

(H20→H21：連携研究者)